

IV 教職サークル活動

教職課程履修者全員を教職サークルメンバーと登録し、1-4年生の集合体としての教職に関する研究開発活動を通して、教職への自覚を高め、実践的な指導力を身に付けるための研鑽を行うこととした。

学生への活動内容紹介

○ Circle Café(仮称)

毎週一回昼休みに、教員養成センターでサークル・カフェを開き、教職担当教員と学生との語りの場を開催します。ここでは教職に関する情報交換や何をしていくことが大切なのかを話し合ったりして、今学んでいることの手応えを確認し合います。

○教職アドバイザー

教員養成センターの教職員が教職課程履修する学生の皆さんのアドバイザーになります。配付の教職キャリアファイルをもとに、教職履修に関する事を中心に勉学について相談に乗ります。教職キャリアファイルには授業での学びや教育ニューススクラップなど教職に関する学びを綴っていきます。

○研究開発活動

教職課程を履修する皆さんの実践的指導力を育成するため、半期単位で以下のセクションの一つに所属してもらい、その部門について調査・研究を通して自主的に学習を進めてもらいます。

- | | | |
|---------------|---------------|----------------|
| ・文法事項の効果的な指導 | ・発音・音読の効果的な指導 | ・リーディングの効果的な指導 |
| ・リスニングの効果的な指導 | ・語彙を増やす方法の指導 | ・補助プリントの作り方 |
| ・ITCを使った教育活動 | ・教育ニューススクラップ | ・学級運営 HR 活動 |
| ・生徒相談 | ・課外活動のあり方 | ・保護者との接し方 |
| ・教員採用試験対策 | ・面接指導 | ・教育用語・人名集 |

○学内「勉強会-教え方教室」や外部英語教育研究会へ参加

○実践報告集の発行と学生の研究活動の要約の掲載

現場の先生の実践報告や研究ノートの編集掲載とともにサークルの研究活動の要約を記載します。

と、高い志を持ってスタートしたが、計画どおりに進行することはできなかった。秋学期では、教職課程履修者も確定されて、教員養成センター担当教員のグループごとに一定の成果を上げることができた。今後、まだまだ改善の余地がある活動である。

学生によるサークル活動報告

教職サークル(水曜6限・中井グループ)の活動記録

高井 楓

<主な活動内容>

「興味・関心を抱かせるための指導とその工夫」というものを討論の主題とし、消極的であったり、英語嫌いな生徒のやる気をどのように導き出すべきかを考えた。ここでは、自主性を引き出すことが教員の果たすべき役割であるとし、授業はおもしろくないと生徒に感じさせないための、なぜ?を考えさせながら、作業のできるプリント作りをすべきだという結果に至った。また、英語が分からないから面白くないと感じる生徒に対しては、怒らずに分かるまで説明し、より容易に理解できるよう、例えば、一緒に教材の読み込みを行ったり、身近なものや実物を用いて解説するなどの工夫できる力が教員には必要であるとなった。

秋学期後半では、様々な新聞記事を題材として教育の現場で起こっている問題を議論した。学歴社会で知られる韓国と比較して見える、日本での教育の伸び悩みや後退、小学校での英語教育の是非などについて考えたが、なかなか難しいものであった。

<考えさせられたことや感じたこと>

授業中に生徒個人で作業をさせるのとグループワークとではどちらがよいのかについて意見したが、グループではシェアをするため円滑に授業を進めることができるが、正確なものを求めている場合には適さないなど、どちらの形をとるにおいても、ワークの最後のプロダクションがどこにあるのかで、教員は判断せねばならないことを学んだ。意見がぶつかったのは、児童のインターネット利用の是非であった。利用することによって授業内での疑問を解決できたり、一つのテーマから派生して視野を広げることができる一方で、コピー&ペーストが多くなることで考えないことに繋がったり、パソコンリテラシーに差が生じたりするなどの懸念の声があり、授業や宿題にインターネットを取り入れるのは困難だと感じた。そして、世間でも注目を集めている小学校での英語教育

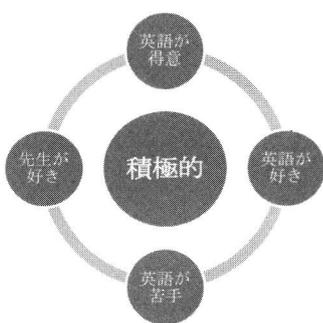
の導入問題だが、ネイティブの話す英語を英語とするのか、日本人の話せる英語を英語とするのか、根本的な基準が定まっていないう限り、この議論は絶えないように思われた。

「集団討論：興味・関心を抱かせるための指導とその工夫」
教職サークル（火曜7限・中井グループ）の活動記録

善積 実希

秋学期は討論を中心に教職サークル活動を行い、自らの日本語・英語の言葉の表現力を養うための練習も行った。

言葉の練習では、討論を始める前に、会話のトピックについて英語で書かれたカードを使用し、トピックに沿って英語で自分の考えについて話した。教員になるにあたって、トピックを与えられて、すぐに自分の考えを英語で表現することができなければ、授業を円滑に進めることはできない。この作業を繰り返すことによって、意見を求められていないときでも、常にある物事について考えを持っておかなければ、人前で意見を述べるが大変困難であることに気付いた。また、自分たちの英語力についても気付くことができた。「英語の教員になる」ために、どれだけの英語力が必要であるのかを再確認することができた。加えて、「教員」を目指す上での勉強の必要性を強く感じた。日本語の練習においても、英語と同じく、関心を持ったトピックに関して意見を述べる練習を行った。

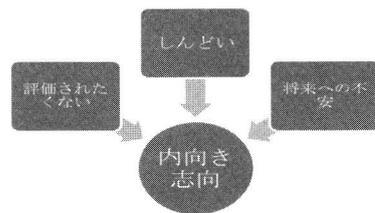


討論においては、さまざまなトピックについて話し合った。まず、英語の授業に対して積極性がない生徒について。積極性がある生徒は英語が分かる生徒で、積極性がない生徒は英語が嫌いなのか？必ずしもそうではなく、積極性がある生徒の中には、英語が得意である、または好きであるために積極的である生徒や、英語が苦手であるために積極的に授業を受けている生徒、または英語が苦手であるが、英語が好きな生徒、そして英語担当の教員のことが好きな生徒がいる。など、「英語の授業に積極的である＝英語が得意」であるとは必ずしも言えないという結論に達した。では、好かれる教員とはどういう教員か。教え方が上手い、英語の語源を教えてくれる、または英語以外にも知識があるなどである。また、そのような教員であることに加え、英語の授業に消極的な生徒が積極的になるように導くには、教員自身の

英語に対する経験、英語を学ぶことの必要性を生徒に話すこと、つまり教員には「授業と生徒の関わり」を生徒に認識させる必要がある。

次に、義務教育で一定の決められた教科書を使って授業を行うことについて。義務教育で決められた教科書を使うのは、生徒全員を平等にするためという意見が出た。例えば、東京、いわゆる都会と呼ばれる地域と奈良とでは、同じ教育が行われるのか。各都道府県によって塾の数も違い、外国人の数も違う。つまり、都道府県によって教育の環境が違う。ということは、東京と奈良、都会とそうでない地域の進学率にも差が出てしまうのではないかと。義務教育における学校の教育では、このような差が出ることを防ぐために、一定の教科書の使用の推進を行っている、とう結論に達した。前述した「生徒の積極性を引き出す」という討論にも出てきたように、英語の授業に消極的な生徒には、ただ単に教科書に載っていることをだけを授業で取り上げるだけではいけない。これは、一定の教科書を用いることによって「英語の授業のマンネリ化」が起こりやすいことにも影響がある。

また、最近よく言われている「若者の内向き志向」について。このテーマで書かれている新聞記事を用いて討論を行った。データにおいても、海外へ留学する日本人の学生の数は年々減少している。一方で、韓国や中国の学生の留学数は、増加している。新聞では、日本人の英語力を鍛えることが、若者の外向き指向を生みだすきっかけとなると述べられている。英語力を鍛えるには、情報通信技術を活用した英語の授業の改善、生徒が英語でコミュニケーションをする機会を増やす、そして教員自身の英語力を高める必要がある。なぜ、若者が内向き志向であるか。しんどいことから逃げる、つまり安全志向の若者が増えているからではないか、という意見が出た。これは、「大学を出たところで…」や「留学したところで…」と考えてしまうからである。就職難と呼ばれる現代の中で、大学を卒業しても、なかなか就職先を見つけないことができないため、将来への不安を感じている若者が大変多い。また、「評価されえる」ことを拒否する学生もいるが、評価なくて進歩はない。一方で、「答えをすぐにききたがる」、「どうしたらよいか」と指示を求める「指示待ち族」という学生が最近では問題となっていることにも原因があるのではないかと。このような学生に、教員が外向きな志向を引き出す必要がある。内向き志向の学生が増えているという中でも、外向き志向の学生も必ずいる。しかし、留学するには経済面を考慮する必要がある。経済面から留学を諦める学生もいる。経済の格差が教育の格差を生んではいない。そのため、行政や機関、学校が経済的なサポートを行えば、たくさんの学生が海外へ行く機会を得ることができるのではないかと。



このように、教育にはさまざまな問題が存在し、教員はこのような問題に取り組まなければならない。そのためにも、教員を目指す私たちは日頃から「考える」力、日本語、英語と共に自分の考えを言葉で「表現する」力を養う必要がある。生徒に関するさまざまな問題は、学生である今の私たちであれば生徒に近い立場で考えることができる。教員になってから教育に関わる問題を考えるのではなく、教員を目指している今も、しっかりと考える必要がある。

教職サークル(月曜6限・夫グループ)の活動記録

小島 緑

10月から約4ヶ月間教職サークルで、中学校の英語の授業の指導案の作成に取り組みました。私は中学校2年生の教科書 New Horizon を使いました。文法事項の理解と自分の授業のオリジナリティーをどう組み合わせるかが難しかったです。難しすぎても、簡単すぎても生徒のモチベーションはあがらないと思うので、その難度をどのくらいにすればいいのかは、やはり実際に授業をしてみて、生徒の反応を見て、感じてでしか工夫していけないと感じました。先生になったとしても同じ授業の繰り返しではなく、試行錯誤を繰り返して工夫した授業を心がけたいと、つまらないものにしかならないと感じました。以下は私が、Unit4 の Home stay in the USA の指導案を作成した最終版です。6時間分の3時間目の指導案を作りました。

全体の目標【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】*アメリカや他の国の文化を知り理解しようとする。* have to, don't have to, has to, doesn't have to を使って、相手の言っていることを理解し、自分の言いたいことを積極的に伝えようとする。

【表現の能力】

*助動詞を使って、自分の生活の中でどう表現できるかを考え、話す、書くことを通して、相手に伝える。

【理解の能力】

*本文の内容を読み理解する。

*ターゲットの助動詞を使って文をつくり話し、書く。

*相手が話していることを聞き理解する。

【言語や文化についての知識・理解】

*アメリカの生活と日本の生活の違いを理解する。*助動詞の意味を理解し、話す、書くことを通し使う。

本時の目標 3時間目/6時間

(1、2時間目 have to と don't have to また has to と doesn't have to 文法の事項と本文の内容確認を行う。)

- have to, don't have to, has to, doesn't have to の理解ができているかを確認する
- 自分や家族の日常生活の表現を学ぶ
- グループでの発表を通し have to, don't have to, has to, doesn't have to の表現を言えるようにする。

時間	内容	評価
20分	[1日の生活を考えさせ、自分や家族のしなければいけないことをどう表現するか考える] *考えてもらい発表する(英語でどう表現するかも習った単語はどうか質問し考えさせる。) EXAMPLE: wake up, eat breakfast, go to school, take a bath, wash dishes, dump trash, washing clothes, washing my lunch box, take a bath, go to bed go to cram school, など *この時何時にそれをするか決めていなければ何時に何をするという表現も教えることができる。(I have to ~ at 7:30など)	*積極的にアイディアを出そうとしているか。 *アイディアが出てこない場合は一度ペアで考えてもらう。 目的 ◆have toの表現を定着 ◆日常生活の表現を学ぶ
15分	[ワークシートで自分の家族のしなければいけないこと、しなくていいことを考えさせる。] *この時3人称の時has to, doesn't have toになることをもう一度確認しておく。 *先に説明したように時間についての決まりがあれば、付け加えて書くように言う。	*文法の使い方を理解しているか *生徒がわからない表現があれば質問できるように見回る 目的 ◆たくさん英語の表現を知る
15分	[4~5人グループになり発表する] *グループ内で1人1文ずつ順番に発表する [クラス全体で発表する] *クラスみんなの前で発表する *他の人の違う文章をワークシートに書く	*積極的に発言し参加しようとしているか見る *他の人の発表も聞いているかワークシートで確認する。 *have toの表現を正確に言えるようになっていくか

森下好香

初回のサークル時に、今後当サークルで何をしていくかを決めました。それぞれの提案を考えた結果、指導案の作り方を勉強しようとなり、11月1日にはサークルの参加者3名がそれぞれ、中学校の英語教師となった上での指導案を作成してきました。それぞれ3名は1年、2年、3年の担当教員と分かれるようになりました。指導案では、まず教科書のどの単元にどれくらいの授

業数を使うのか、その授業の目標、どのような形で授業をするのか(Group)などを決めました。そして、その中の1時間をどのように使うのかを詳しく書き、何を生徒に求めるのか(skill)、彼らの評価をどのようにして決めるのかを考えて作成しました。その次に、その授業でプリント類などを使うのならば、そのプリントも作成し、担当者以外の2名を自分の生徒と仮定した上で、その2名に評価してもらいました。例えば、「この部分はどのように改善・修正すれば、よりわかりやすい」などということです。他には、もしそのプリントが小テストなどの問題用紙ならば、その彼女たちの答えをどのように評価するのかということも考えました。

このサークルを受ける前は、教師になったら指導案などを作成しないといけないということすら知らなかったので、すぐくたけになりました。また、その指導案には何を書かなければならないのか、どういったことを考えないといけないのかということを知ることができました。今後の課題としては、以下の2点を挙げたいと思います。

1. もっと自分の日本語の力を伸ばさなければならないこと、例えば問題を作る際にはどういった日本語が適しているのかを適切に判断し、表現できるようになること。
2. もっと生徒の立場になって考えなければならないということ。授業で発表という形を取るのならば、聞く生徒たちは何をするのか、何もしないでただ聞くといった形にすれば、生徒たちは聞かないかもしれない、集中力が切れるだろうといったことも考慮しないといけないということ。

上記の問題点を改善して、もっと指導案を詳しく書き、力を伸ばしていきたいです。そのために、サークルにこれからも参加し、他の人たちからの評価をもらい、話し合い、いろいろなことを知ることが必要だと思います。

教職サークル（火曜日5限・東條グループ）の活動記録

酒井未貴 田口真弓

私たちのグループでは、毎週火曜日の5限目に英語や英語教育に関する新聞記事もしくはインターネット上のニュース記事を毎週一人が持ってきて、内容をよく吟味し、自分はこの問題についてどう感じたか、もっとこうするべきではないか、という議論を行っている。同時に英語教育への関心をより深め、学習のモチベーションを高めている。私たちは東條先生を合わせて3人という少人数のグループではあるが、一人一人の意見をじっくり聞くことができ、それぞれの意見が尊重されている。

頻繁に取り上げられているテーマとして、来年度より全国の小学校5,6年生に必修化とされる外国語活動(英語)の「小学校英語教育問題」がある。外国語活動(英語)とは小学生時代から英語に親しむことでコミュニケーション能力を向上させようという狙いだが、そこにはいくつもの問題があるように思える。例えば、日本語も十分でない時期に英語を教えることや、英語教育について経験のない小学校教師の負担、それによるALTの雇用問題、また地域差等だ。私たちがなぜこのテーマを取り上げたか、それは中高の英語教師を目指す私たちにも、国際化といわれている現代社会において避けて通れない問題だと思うからだ。しかし、このテーマを掘り下げていくうちに、良い部分と不安定な部分も明白に見えてきた。この問題はこれから施行されることで、まだまだ改善の余地はあるし、結果を見ての議論も必要であろう。

私たちはこのサークル活動を通して、現代における英語教育の現場における様々な問題を知ることができ、将来教壇に立とうと思っている私たちにとっては非常に有益な活動内容であったと実感している。

「教えられ教えられるながら」

教職サークル（金曜日7限・中垣グループ）の活動記録

堀田真由

OJC 教職サークルで秋学期を通して、自分を人に合わせることの大切さを学びました。教職の課題である「数学」は私にとって高校時代最大の苦手科目。もちろん他のひとにも苦手科目は当然あります。その科目を克服するために友人に聞き、友人から教えを乞い、友人と共に考える事で問題を解決させる。わからない部分があれば相手がわかるまで説明する。自分の考えを押し付けるのではなく相手の考え方を理解して説明するむずかしさ。そういった共同作業の中でひとつの事を成し遂げる大切さを改めて感じました。他人との違いを感じとりお互いが刺激しあって成長したような気がします。教職概論などの授業から得る知識だけでなく、色んな人と意見交換をし、体験を分かち合い、それぞれの経験値をあげていくことが必要であると改めて感じました。これから教職に関する科目が段階的に増えていきますが、それぞれを単位・単語としてとらえるのではなく、自分なりに考えて人との会話の中から自分なりのフレーズを考えて吸収していきたいと思います。

教職キャリアファイルでは教職を志そうとした自分の考えを書いたり、自分の実際の習熟度を客観的に見る事ができました。これを利用することは自分を評価して自己の考えを整理することに役立ちました。ファイルの製作はこれからの授業の中で必要な作業であると感じました。教職への道はとても険しく、勉強することがはてしなく山積みされています。教職への確かな自覚をもって、人と将来の夢を共有しながら進んで行きたいと思います。

教職採用試験対策の授業については、必修授業と重なった為に受ける事ができませんでした。一般教養試験対策として力をつけるための授業は高等学校での各科目の知識・教養を復習するのに役立ったと受講者から聞きました。自分自身の高等学校

での再復習をする必要があると思います。また、外部講師の方の話では「生徒が理解できるまで自分で考える習慣が無い」「英語の点数がとれる生徒でも英語が読めない」と言われた事を覚えています。これは自分に当てはまることであり、自分が人を教える教職の立場になるために身につけなければならない事がたくさんあるように思い、参加したいと考えました。

「教育と人間」夏季集中講座では、「いかに生徒の名前を覚えるかが大切か」と聞き、先生と生徒という関係はまず相手を理解することから始まることも教えられました。

とにかく参加人数が少なく教職サークルの授業というよりは、先生から実体験を聞き教職の楽しさを教えてもらった気がします。自分が教職の立場になればそういう体験ができるという希望もできました。また反面、自分が教職にすすんでも良いのかと考えることにもなりました。

教職サークル（春学期・中垣グループ）の活動記録

岡野紗英

私たちのグループは教育関係の新聞を切り抜き、スクラップをした。そしてスクラップごとにカテゴリを決め、またそれを分類し保存した。中には教育と関係があるのかよく分からないものも紛れていたが、だいたい教育と関係があるものだった。分けるにあたってその記事をじっくりと読みそれからどのカテゴリに分類できるかと、その記事についてどう思ったかを述べていった。これらが私たちの主な活動だった。

この活動を通して、教育のさまざまな問題に触れることができた。例えば教員に対するクレームが教員を退職に追いやるという問題を記事にしたものがあつた。これは最近問題になっているモンスターペアレントに関連している。モンスターペアレントと言われると子供のいうことだけを信じ、学校の意見を全く受け入れない困った親を思い浮かべてしまう。だが記事を読んでいくうちにモンスターペアレントだけが悪いだけではないことに気づいた。同じ事件の記事を見比べてみると、全く内容が違ったからだ。ある新聞社は主に教員側を擁護する内容を書いていたのに対し、違う新聞社はモンスターペアレントを擁護する文章を書いていた。また、書き手の意見が入っている、ないというのも印象的だった。ある物事を一方的に解釈するのではなく、多方面から情報を収集していくことが大切で、書き手の意見を丸呑みしてしまうのは危険だという結論に至った。

それからこの記事で一番問題なのはモンスターペアレントという呼び方ではないか、という話になった。モンスターと言われればやはり悪いイメージしか浮かばない。確かに中にはモンスターと呼ばれるような親もいるかもしれない。だが、そんな親の中にも教員側に不手際がありそれを言いに来た親もいる可能性がある。後者の親をモンスターペアレントに含んでしまうと、全く話が違って来るだろう。その顕著な例が上記の記事だったように思う。

私たちに必要なものは情報をいかに多方面から集め、その情報を一方的に解釈しない柔軟な考えが必要だとこの活動から改めて感じ取った。